

第 36 回電気通信普及財団賞 表彰者コメント ～テレコム社会科学賞～

< 順不同 >

※当論文賞受賞時の所属を記載しております。

松下 慶太 氏（関西大学 教授）

テレコム社会科学賞 入賞
「モバイルメディア時代の働き方」



この度は拙著を「第 36 回電気通信普及財団賞テレコム社会科学賞」の入賞作品に選んでいただき誠にありがとうございます。選考いただいた電気通信普及財団選考委員の皆さまに感謝申し上げます。

拙著はワークスタイル、ワークプレイスの変容をモバイルメディアの展開と結びつけながら分析したものです。拙著は 2019 年までの調査・研究をもとに書かれたものですが、奇しくも 2020 年以降のコロナ禍により日本でもテレワークやリモートワーク、ワーケーションあるいはオフィスのあり方など本書で取り扱ったテーマがより広範に、そしてより真剣に議論されるようになりました。拙著がこうしたテーマについて学界のみならず産業、地域においても議論・実践するなかで貢献があれば幸いです。

拙著を執筆するにあたって国内外複数箇所での長期に渡るフィールドワークを実施しました。フィールドワークでご協力いただいた方々はもちろん、その実施にあたって電気通信普及財団の研究助成をはじめ複数の研究助成にも多く助けられました。またメディア論のみならず都市論、建築学、地理学なども含めて広範な領域をまとめるのは多くの方々のコメントやフィードバックなしには成立しませんでした。関係者の皆さまにはこの場を借りて感謝申し上げます。

今回、このような評価をいただけたことを励みに今後も私たちが「働きたいように働ける」社会を実現するための調査・研究を続けていきたいと思っております。

田路 則子 氏（法政大学 経営学部／大学院経営学研究科 教授）

テレコム社会科学賞 奨励賞
「起業プロセスと不確実性のマネジメントー首都圏とシリコンバレーの Web ビジネスの成長要因ー」



この度は、「第 36 回電気通信普及財団賞テレコム社会科学賞」を賜りましたことに心より感謝申し上げます。

本書は、首都圏と、アントレプレヌールシップの聖地と讃えられるシリコンバレーのスタートアップを 7 年間追跡したものです。2010 年代の Web ビジネスにおいては、日本は米国よりも成長性が低くはないという発見は通説を覆します。起業家の年齢は 30 代半ばであり、資金調達と成長の確率にも大差はない、ただし、レーター段階の投資額は桁違いに少なく、結果としてユニコーンの輩出が日本では少ないことが説明できます。世間では、GAFA に大きく水を開けられている日本企業の弱さが指摘されていますが、それは、起業時点における製品サービスのハイテクレベルの低さに起因するであろうことが、本書の日米比較により推論できます。しかしながら、世界の中でシリコンバレーは例外であり、首都圏の Web ビジネスは、今後、AI の伸長や若い世代の活発な起業によって勢いを増すでしょう。

本書はまた、成長したサンプルを取り上げて、起業機会の認識と意思決定を解き明かしています。起業家は仕事の経験やネットワークを活かして機会を認識し、不確実性の高い状況下において、曖昧さを抱き込み、予期せぬ事象を逆手に取るような意思決定を行なっています。そのようなエフェクチュエーションの理

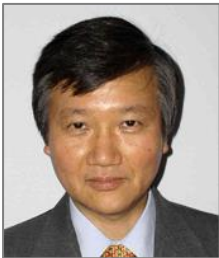
論に則った意思決定は起業だけではなく、新規事業のマネジメントにも活用できることが、読者におわかりいただけると期待しています。大企業の経営者がイノベーション級の新規事業を渴望しつつ、企画立案の段階で、期待利益や明確なターゲットの設定を求めるといふ理不尽さを見直すきっかけに本書が役立ってくればという願いがあります。もちろん、起業を志す人に手にしていただき、不確実性の海を泳ぎきる一助になることを期待しております。今後も、機会認識と意思決定のプロセスのさらなる解明に尽力する所存です。

ところで、本研究に着手した時期に、電気通信普及財団の研究調査助成(2010-2011年)をいただきました。その10年後に発表した成果によって受賞できましたことに、重ねて御礼申し上げます。今後も、貴重な研究助成を続けていかれることを祈念します。

山口 広文 氏 (立正大学 文学部 特任教授)

テレコム社会科学賞 奨励賞

「情報革命の世界史と図書館 粘土板文書庫から「見えざる図書館」の出現へ」



この度は、「第36回電気通信普及財団賞テレコム社会科学賞 奨励賞」を賜り、大変光栄に思っております。電気通信普及財団の関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

私は、かつて国立国会図書館に勤務し、主に国会議員のための調査業務に携わり、国土整備や情報通信などの分野を手がけました。今は大学で教鞭をとり、図書館司書課程を担当しています。こうした傍ら、文明史の世界的な流れに深く関心を寄せてきました。

受賞作品は、「情報」の視点に立脚した「グローバルヒストリー」へ向けての一つの試みといえます。言うまでもなく人間の集団的な営みは、情報の伝達と蓄積に依拠しています。そして、情報の伝達や蓄積に用いられる手段の画期的な革新「情報革命」が、文明社会の変化を促進する役割を果たしてきました。拙著では、5000年余の文明の歴史をたどり、一連の代表的な情報革命として、「文字の使用」、「紙の普及」、「印刷術の革新」、「電信の発明」、「ICTの普及」の5つを取り上げ、時代状況と展開を概観・分析しています。特に、情報の中核的な担い手として、「図書館」に注目しました。

この受賞を機に、内容を吟味し考究を深めていきたいと考えております。

改めて、これまでご指導ご啓発いただいた方々に感謝の念を表しますとともに、電気通信普及財団の益々のご発展をお祈りいたします。

實原 隆志 氏 (福岡大学 法学部 教授)

テレコム社会科学賞 奨励賞

「情報自己決定権と制約法理」



この度、「第36回電気通信普及財団賞テレコム社会科学賞 奨励賞」を賜りまして、心より御礼申し上げます。これまでもお世話になった方々に加え、大変にお忙しいなか拙著に目を通してくださった審査委員の皆様をはじめとする、財団にご関係の皆様へ感謝しております。

本書で取り上げた「情報自己決定権」は、ドイツ連邦憲法裁判所の1983年の判決において、自己のデータの利用等について自分で決定する権利として導出されたものです。その後、この権利は様々な場面で援用されるようになり、日本の憲法学界でも広く知られるものとなりました。本書ではそれをふまえ、新しい技術の「活用」が日本国内で発生させた法的課題を、情報自己決定権の制約の問題としても位置づけながら、ドイツの議論を手がかりにすることで解決できない

かを検討しました。

情報技術の進展は、様々な効用と危険をもたらすものです。それに対して、行政府や司法府による柔軟な対応に期待するのも一つの方法ではありましょう。しかし、それは場当たりのなものと成りえますので、有権者を代表する機関である議会による立法を通じて、権力と技術の使用を、可能な限り民主的に統制する必要があると考えるに至りました。

とはいえ、本書に対しては、各種書評等においても様々なご指摘をいただいております。そして、それは、関連する他の拙稿についても同様です。情報通信技術の発達により、判例や学説が国境を越えて取り上げられるという時代において、取り残されることのないように研究を継続することで、今回いただいた評価にお応えできるよう努めてまいります。

柴田 邦臣 氏（津田塾大学 学芸学部 准教授／インクルーシブ教育支援室 ディレクタ）

テレコム社会科学賞 奨励賞

「〈情弱〉の社会学ーポスト・ビッグデータ時代の生の技法ー」



「第 36 回電気通信普及財団賞テレコム社会科学賞 奨励賞」をたまり、深くお礼申し上げます。貴財団の社会科学賞は身に余る光栄ですが、浅学の身ながら、ぜひご縁をいただきかけた賞でした。と申しますのも、私が大学院に入り研究職を志す中で拝読してきた、碩学の先生方のご好著が、受賞の歴史に名を連ねていらっしゃるからです。末席を汚すようで恐縮でもありますが、本賞のリストは私を含め後塵を拝する学徒にとって、まさに「道標」だといえます。その榮に浴しましたことに深謝申し上げるとともに、ますます勉勵に尽くす所存です。

このたびの拙著第2章のように、私は山歩きが趣味で、特に「道標」という存在に惹かれています。「道標」のいいところは「強いずに意志を高める」点です。「道標」に書かれているのは「どこまで、こっち、あと何キロ」という至極簡潔な情報だけです。これからどうしろ、どっちを選べ、どう歩けなどという指示めいたことは、まったくありません。そんなシンプルでぶっきらぼうな情報が「今日は歩けそうだからこっちのルートを取ろう」「日が暮れそうだから早歩きで行こう」などのように、登山する主体の自由な判断、何より「歩く意志」の源となる。過剰な情報に埋もれるよりも「道標」程度の、少し不足気味で不親切ぐらいの情報の方が、私たちの主体的な意志を生み出し、歩く〈技法〉、ないしは〈生の技法〉を高める契機になるのではないかと。

一方、過剰にリッチな「道標」は無用だとしても、「道標」そのものが失われては、先に進むことができない。その、「道標の剥奪」とでも言うべき事態が現前したのが、2020年のCOVID-19 Crisis でした。将来が見とおせない＝「道標が奪われた」時代は、多くの生徒学生たちから、特に、拙著6章で言及しました「障害のある子どもたち」から、学ぶ意欲、「学ぶために努力する意志」を奪いつつあります。その考察と実践の必要性を Learning Crisis と定義し、昨年『まなキキ』(<https://learningcrisis.net/>)や、

新しい「魔法」の時代へ、ようこそー Learning Crisis とポスト・コロナの情報社会ー』(https://rad-it21.com/ai/kuniomi-shibata_20201001/)にてまとめました。これは拙著の続編のつもりで出したもので、執筆時の問題意識こそが先駆けとなったものでした。その意味でも、このタイミングで受賞の榮譽にあずかり、審査員の先生方、財団のご関係のみなさまのご高配に、あらためて厚く御礼申し上げます。

まったく未来を見とおせない、まさに「道標」さえ失われつつある、この Crisis の時代において、それでも必要なのは「学ぶ意志」だと確信しています。「テレコム社会科学賞」が、五里霧中の情報社会を〈生き〉抜き、〈学び〉抜くための「道標」として、ますます隆盛されますことを祈念し、お礼のご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。